
アルディアの大地と僕の本

edenn

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アルディアの大地と僕の本

【Nコード】

N9222Y

【作者名】

edenn

【あらすじ】

魔法と剣、魔物と龍、それらがあふれる

現代とは違う世界、そんな世界で生きる少女と

白銀の瞳と共に現れる不可思議な本、その本には

0と数字が書かれているのみで、他に何もなただの

本、そんな本と少女の成長、少女を取り囲む

戦争や学園、日常など様々経験を積んでいく

最強少女の物語

5 歳児の僕

「不幸」それは誰もが生まれながらに幸福と比例してつきまとう、人の人生に置いて

不必要であり必ず存在する影のような物。僕はそう思っている。

青々と広がる空を見据え、僕は小さな丘の上から全身に風を浴び、水色に伸びた長い髪を撫でながら丘の上に生える野草を摘み取った。

緑色のローブと灰色のかぼちゃパンツを身に付けた5歳に満たない小さな少女。

それが僕、僕は魔法とは違う力を持っている。

それに気がついたのは4歳の頃だった。

僕の瞳は水色の透き通るような青、そう村の人たちは言っていたけれど

僕が両目を閉じて「開きます」というと、再びまぶたを開いたら僕の瞳は白銀に変わる。すると、僕の瞳に奇妙な本が映り込むんです。

その本は空中にプカプカと浮かんでいて、白銀の瞳の時はその本に触れることも

できるし、めくることもできるんです。

けれど、「閉じます」と両目を閉じたままそう言つと

その本は見えなくなってしまうんです。

不思議な話ですが、これは現実に僕の目の前に起こっている事実なんです。

それに、僕の瞳が白銀の時には僕には本は見えるけど、他人には何も見えないらしいんです。

それはおじいたんで実験済みです。もちろんおじいたんの目が悪いのでは？ という意見も

あると思いますが、おじいたんの視力は4.0と森の隅々まで見渡す事のできる

狂人的な視力をしているのでそれは除外されます。

だからこそ、僕にはこの本が不思議でたまりません。

毎日寝る前に一度、この本を開いて中身を確認するんです。

本の表紙には何も書いてありません。

青色の質のいい紙を使用し、中身は白紙のページが5000ページほどあるんです。

何度も数えましたから間違いありません。

今申したようにこの本には文章らしい文章も

言葉らしい言葉も何一つ書かれていないんです。

けれど、ただひとつだけ、1ページ目にだけ数字が書かれています。

それは0、数字の意味はわかりませんが「0」とだけ書かれていますよね。

これは多分魔法とは別の力だと思ってます。特に使える力ではありませんが

きっとこの先、僕はこの本の謎を解き明かし、なんなのか知りたいたいと思っています。

だから今は、勉強です。勉強して知識をつけて、物事を考えられる力を付けたいと

思います。僕は5歳なりに将来を考えているんですよ。

この野草もその勉強に必要な物、この野草はすりつぶしてアルクの実と混ぜると

風邪によく効くいいお薬ができるんです。その知識はおじいさんから覚えた物で

おじいさんはこの村に一人しかいないお医者さんなんです。

そんなおじいさんと二人暮しをしていく中で僕は様々な野草の知識や用語を

覚えてきました。今日は村の先生が風邪をこじらせたためにその薬を作るため

野草を摘み取ったわけです。

僕はそのまま野草を皮の入れ物の中に入れ、数歩を野草の植えられた丘を進み

古ぼけた家の中へ足を進めた。

外のボロボロの外見とは違って中は埃一つない清潔感あふれる空間が広がる。

僕はそのまま野草を水桶で洗い、木のテーブルに置かれた赤色の実を器に移し

頭の位置にある高いテーブルに椅子をあてがってその椅子の上に足を載せる。

テーブルに2つの野草を載せた器を置くと、それをゴリゴリとすりつぶしはじめた。

しばらくそれを続け、緑色の液体と赤色の肉片が散らばる器の中身を取り出し

そのまま小さな瓶の中に移し、植物から取れる油を僅かに垂らし、蓋をして

二十回ほど降る、そしてようやく、薬は完成する。

僕はそのままその瓶を手に取りおじいさんのいる病室へと椅子から足を下ろし、きれいに

着地したあとに向かった。

病室の扉を開くと、おじいたんが患者の先生の腹を触り、具合を調べている。

それに僕は満面の笑みを浮かべ、額に汗をしながら可愛らしく声を上げた。

「おじいたん！ お薬できたよ？」

それに白色の長い髪をした老人が耳を傾けるようにして反応し、しかし顔はこちらに向けずに答えた。

「そうか、いつもすまないね。そこに薬を置いておいておくれ」

僕はそれに片手を上げ、嬉しそうに声を出した。

「はい、おじいたんお仕事頑張ってるね」

「うむ」

そう言って水色の髪を揺らせながら僕はテーブルに薬の入った瓶を置く

その部屋を退出した。

ドアが閉じると同時に僕は耳をドアの板にくっつけてドアの先から聞こえてくる

声を盗み聞きする。

「フローラちゃん、まだ5歳そこらなのにもう薬まで作れるようになったんですか

すごい、教師の私が言うようなんですが、彼女は将来きっとこの国の知恵になりますよ

それは私なんて遠く及ばない程の偉い子になりますよ」

「わしも驚いているんですよ。あの子は夜な夜なわしの持っている本を

絵本のように読んで、そしてわしに気になった部分を聞いてくる。あの子の目は娘そっくりだ、頭のいいところも水色の髪も可愛らしい顔つきも

優しいところも、だからワシは恐れているのだ、あの子が母のように誤った道を進むことを」

「誤った道……ですか。しかしそれは……」

「わかつておる、だが、我が娘のしたことはやはり間違っている。

大勢を救うために自らを犠牲にするなど、優しすぎる心は時にして人を傷つける。元にあの子は母親を失い、こんな後先短い老人と

二人暮らし

わしは、あの子がかわいそうでならんじゃ、今は母親に最も甘えたい

時期だろうに、本当にかわいそうに思う……」

同時に僕は扉を再び押し開いて、大きな声で叫んだ。

自分の気持ちだけはおじいさんに知ってほしいから。

だから僕は大きな声で叫んだ。

「おじいたん！　僕は別に寂しくないもん。お母さんが土の中に埋められた時

僕はまだ1歳で声も顔も覚えていないけど、だけど寂しいなんて思ったことはないもん

だっておじいたんがいたから、優しいおじいたんが……だから……

……」

それにおじいたんが、優しげな表情を浮かべこちらを見据えて

大きく手を開き、僕はそんなおじいたんの手の中へ小さな体で駆

け寄って

飛び込んだ。

おじいたんの体は温かくて、薬品の匂いがいっぱいした。

「そうか……そうか……」

おじいたんの優しい手のひらが僕の髪を撫でてくる。

それはくすぐったくて、それでいて僕はその手のひらが髪に触れる度に

胸の中が暖かな何かに包まれるような感じになっていた。

それからしばらく僕はおじいたんの胸に寄り添い、そしていつしか眠ってしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9222y/>

アルディアの大地と僕の本

2011年11月27日17時53分発行